向陽新聞
高知市塩屋崎町1の2
土佐中・高校新聞部
編集人 発行人　山岡 伸一
印刷　高知印刷

写真
TEL.②6758
大丸東入口前
高橋

土佐高生の大学観

「大学では専門の学問修得」40％ 「大学生はエリートでない」54％

△新聞部アンケート調査結果▽

全国各地の大学で起こっている〝紛争〟は、日本の大学制度問題にまで発展し、大きな国民的関心を呼んでいる。事態は深刻で、なお収拾のきざしは見えないが、今や大学の〝古さ〟が根底から揺り動かされ、ここ二三年が、日本の大学の大変革期にあたるだろうとの見方も出ている。

重要な歴史的意義を持つことになるかもしれぬこの激動の時期にあって、私たちは大学問題をどのようにとらえ、どのような方向に進むべきか――新聞部ではこの点に強く関心を覚え、そのための手掛りを得ようと、このほど全土佐高生を対象に、アンケート調査を行った。ここにはその一部を報告することにする。

中でも最も関心を持ったのは、私たちは何を求めて大学へ行くのか、ということである。私たちはいわゆる受験校にいて、大学へ進む、ということはすでに土佐中時代から、暗黙のうちに了解されている。

しかし、そのような状態の中で私たちは「なぜ大学へ行くのか」「大学は何をする所か」「大学生は特別な存在なのか」と考えざるを得ない。そこで、高校生徒九百人を対象に、次の質問を行ない、土佐高生の〝大学観〟というものを引き出してみようとした。

◇あなたが大学へ行くとすれば、それはどういう理由からですか。二つまでの回答を認めますので次の中からあなたの気持ちに近いものを選んで下さい。

◇大学生は社会のエリートだと思いますか。

◇大学には次の三つの役割があるといわれています。一つは「専門的な学問を研究すること」また一つは「学生の教養や人格を高めること」もう一つは「学生が社会に出たとき実際に役立つような教育をすること」です。このうちあなたが一番大切だと思うのはどれでしょうか。

その結果「なぜ大学へ行くか」という質問に対しては、52％の者が「専門の学問を修得するため」と答え、28％が「教養を高め視野を広げるため」と答えた。このことから、本校生は進学にあたってかなりしっかりした考えを持っていることがうかがえる。一方「立派な人格を養うため」というのは8％強にとどまった。ここで「実社会で有利」「結婚に有利」「出世するため」の三つを合わせると30％近くになり、実利的な目的を持つ者もかなりいることがわかる。そのほか、漠然としてはいるが「青春時代を楽しく過すため」という者が18％いることも注目に値する。「みんなが行くから」「親や兄弟が勧める」「なんとなく」という消極型は、三つ合わせても10％足らずだった。

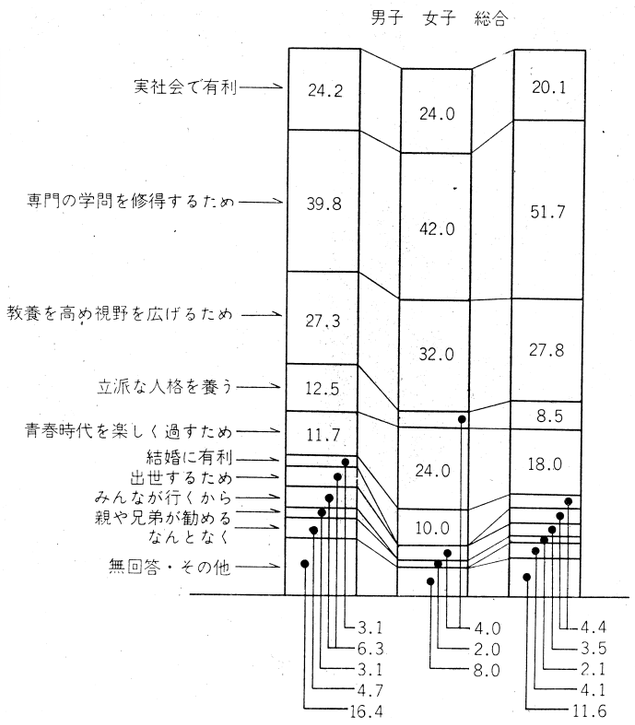
男子やや実利主義的？

これを男女別に見ると男子と女子とではいく分違いが見られる。違う点を拾ってみると、「実社会で有利」など実利的な考えを持つ者は、男子では32％いるのに対し、女子は24％で、男子の方がやや実利的であるようだ。また「みんなが行くから」などの消極的グループは、女子が6％弱であるのに、男子には11％あった。

「大学生を社会のエリートだと思うか」との問に対しては「大いに思っている」というのは7％だけだが、「少しは思っている」者が28％あり、両方合わせると、大学生を一応エリートだと思っている者は35％とかなりいる。しかし、やはり「エリートだとは思っていない」というのが多く、これは54％と過半数を占めている。

次の「大学の役割」については一番多いのが「専門的な学問の研究」が大切だとする見方で37％あり、「教養や人格を高める」というのと「実際に役立つ教育」を重視する者は、それぞれ25％、24％でほとんど同数である。この傾向は、先の「なぜ大学へ行くか」との質問に対する回答の傾向と密接に関連している。つまり、どちらの場合も『大学観』としては「専門の学問を修得する」所だ、と見る本校生の傾向を如実に示している。

あなたが大学へ行くとすれば、それはどういう理由からですか。二つまでの回答を認めますので、次の中からあなたの気持ちに近いものを選んで下さい。
（複数回答につき、回答の合計は100％より多くなる）



大学生は社会のエリートだと思いますか。

	男子	女子	総合
大いに思っている	7・1％	27・6	53・7
少しは思っている	11・6	23・5	25・1
思っていない	14・5	36・9	
無効・無回答			

大学には次の三つの役割があるといわれています。一つは「専門的な学問を研究すること」また一つは「学生の教養や人格を高めること」もう一つは「学生が社会に出たとき実際に役立つような教育をすること」です。このうちあなたが一番大切だと思うのはどれでしょうか。

	男子	女子	総合
専門的な学問の研究	36・9	25・1	23・5
教養や人格を高める	25・1	36・9	14・5
実際に役立つ教育	23・5	14・5	36・9
無効・無回答			

主張

「心の交流」持とう

近頃気にかかることは、「ぼくたちのクラスでは、もうお互いにクラスメートだという意識すら感じられないくらいだよ…」と言った、ある高三生のことばである。現実にそれがどの程度のものであるかは、実際に高三になってみないことには想像できないかもしれないが、しかし、このようなことはかなり前からも聞かれていることである。考えてみれば、貴重な青春の時期を受験勉強に費やさざるを得ないのは、どうにも割り切れないことである。

いったい、高校生活の意義はどういうところにあるのだろうか。それはどこまでも受験などには関係ないことであるはずだ。――それは、つきつめれば、どれだけ多くの人を〝知る〟かということに、ほとんどつきるのではないか。人を〝知る〟とは、ここでは「相手の本質的なもの――《心》――に触れること」と定義づけておく。

互いに上つらだけをなめて交際している限り、それにはおのずから限度がありより深く幅広い進展は期待できない。上べはいかにも連携しあっているようで、その実がないのだから、お互いの間には透き間風が吹き抜けている。そしてちょっとした〝さわり〟があるとたちまち崩れてしまうことである。クラスの者が皆、こうなれば、クラスの雰囲気はなどやかになり、学校の生活もずっと楽しく、充実したものになるだろう。まいにクラスメートだという意識すら感じられない人たちは、そのような機会に比較的恵まれていると言えるが、そうでない人たちは、人とじっくり語り合うこともまれなようである。H・Rにしても、話し合いをやれば変によそよそしくなるばかりで、決して十分に活用されているとは言えない。その意味で修学旅行や合宿、キャンプは良い機会であり、これを大いに活用するのは望ましいが、しかし私たちは日常の生活にも、何かの問題について語ることを、もっと積極的に心がけて良いのではないか。友だちと接触する時間が一番多い日常の学校生活が、やれ試験だ、受験勉強だと、ともすればうつろに流れてしまって、大きな物を見失いがちな昨今である。そこに、腹を割って語り、〝人を知る〟という目標を見出した時、生活にずっとハリができるだろう。親しい友人とでも、自分をさらけだして語ってみよう。友人の中に意外な一面を発見するかもしれない。

できるだけ多くの人を〝知ろう〟と努めることー青春の時代に、とりわけ精神的に不安定な私たちの時代に、これほどふさわしいテーマはないと思うのだが、また、卒業後学生時代を振り返ってみれば、受験一色だった、というようなことにはなりたくないものだ。

〝腹を割って〟語りあってゆくことが可能であるとは、「ぼくたちのクラスでは、もうお互いにクラスメートだという意識すら感じられないくらいだよ…」と言った、ある高三生のことばである。現実にそれがどの程度のものであるかは、実際に高三になってみないことには想像できないかもしれないが、しかし、このようなことはかなり前からも聞かれていることである。考えてみれば、貴重な青春の時期を受験勉強に費やさざるを得ないのは、どうにも割り切れないことである。

いったい、高校生活の意義はどういうところにあるのだろうか。それはどこまで交際している限り、それには限りなく奥深い。それぞれ相手の立場や根本的な考え方が理解できていれば、交流もスムーズで、時に意見の相違から議論を戦わすことがあっても、そこから新しい考え方を導入し、また相手の長所を吸収して自分のものとし、互いに高め合うということの何と乏しいことか。クラブ活動をやっている人たちは、そのような機会に比較的恵まれていると言えるが、そうでない人たちは、人とじっくり語り合うこともまれなようである。H・Rにしても、話し合いをやれば変によそよそしくなるばかりで、決して十分に活用されているとは言えない。その意味で修学旅行や合宿、キャンプは良い機会であり、これを大いに活用するのは望ましいが、しかし私たちは日常の生活にも、何かの問題について語ることを、もっと積極的に心がけて良いのではないか。友だちと接触する時間が一番多い日常の学校生活が、やれ試験だ、受験勉強だと、ともすればうつろに流れてしまって、大きな物を見失いがちな昨今である。そこに、腹を割って語り、〝人を知る〟という目標を見出した時、生活にずっとハリができるだろう。親しい友人とでも、自分をさらけだして語ってみよう。友人の中に意外な一面を発見するかもしれない。

できるだけ多くの人を〝知ろう〟と努めることー青春の時代に、とりわけ精神的に不安定な私たちの時代に、これほどふさわしいテーマはないと思うのだが、また、卒業後学生時代を振り返ってみれば、受験一色だった、というようなことにはなりたくないものだ。

高二修学旅行

まず上々の成果 ―竜馬の墓も見学

「もっとポイントを絞れ」の声も

本年度、高二の修学旅行団は、八日間の日程を無事終えて、十一月一日夜帰着した。

今回の修学旅行は、終止天候にも恵まれ、途中格別事故もなかったことから、先生方の間では「修学旅行が始まって以来、最高のできノ」との評判で、まず上々の成果を収めたと言えよう。それだけにいろいろ話題も多いが、今回は特に明治百年に関連づけて、京都の護国神社にある坂本竜馬ら維新の志士の墓地を見学コースに組みこんだのが特色。その際、竜馬の墓地から少し離れた所にある〝天誅組〟志士の墓地が荒れほうだいになっていることを聞き、一部の生徒が掃除にはせ参じる、という一幕もあった。

旅行団の引率の世話をされた、交通公社の田村さんは「私もちょう何度か修学旅行について行きましたが、今度ほどすばらしい旅行ははじめてです。おまけに、中央公園で解散のとき、生徒さんたちに胴上げされたのには、何とも、胸にジーンときました……」と、やはりベタ誉め。

ところで、十一月八日には放課後、高二各ホーム主任と各ホーム二名ずつの生徒代表により、反省会が行なわれた。反省事項としては、次のようなことがらがあげられている。

▽富士山・庭園など、見学内容はよかったが、もう少しポイントをしぼった方がよい。

▽各場所の見学時間がもっとほしかった。また、見学のとき、自由行動の時間がもっとほしい。

▽名所・旧跡もいいが、近代的設備の工場なども見学したかった。

▽日光東照宮への倒着が日没寸前になってしまったため、十分見学できなかった。スケジュールとともに、日光への交通手段についても再検討してみてはどうか。

▽修学旅行の時期は、秋よりも春がよくはないか。秋は運動会の直後で落ち着かないし、ほこりっぽい。

▽自由時間を利用しての見学の便宜を考えて、旅館の選定にあたっては、その位置も考慮してもらいたい――等々。

来年度からは修学旅行が、全学年を通じて高校での一度きりになるが、これらの反省事項を大いに活用し、修学旅行をいっそう充実したものにすることが、これからの課題であろう。

ひとこと

谷間の反感

○…「熟行部廃止ノ」「偉そうなナ。ナメルナ」熟行部設置の意見箱をあけたとたんに、こんなドキツイ言葉が目に映る。日ごろ2品行方正な土佐校生の言葉とも思われないが、最近こういった熟行部に対する罵詈雑言は存外多いようにみうけられる。しかし、これらは熟行部をけなすばかりで、建設的な意見はもちろん、不平不満すらうかがえない。つまり、熟行部に対する反感をぶつけているだけである。これで我々の生活が改善されるのだろうか。

○…ここで、熟行部の役割というものが問題となってこよう。本来の熟行部の役割は何であったろうか。現在のような政治家的？高級こづかいだろうか。まさか学校側の御用機関ではあるまい。本来は読んで字のごとく〝熟行する部〟であるはずだ。つまり、生徒委員会・生徒総会で決議された事がらを実行するのが熟行部の役割ではないのか。それなのに、先ほどの投書では、自分の意見も書かずにただ熟行部をけなすだけ。どこか珍妙な感じまでしてくる。しかし、これは一部の生徒の投書ではあるが、生徒全体にこのような雰囲気がないとは断言できない。最近の生徒委員会は審議する機能さえ失われ、熟行部から提案された事を承認するだけのものに成り下がっている。そして、熟行部が何か始めると、そこで初めて文句がでてくる。いや、もう最近では心の中では文句があっても、それを外には出さなくなってきた。こんな状態では本当の生徒自治が成り立つはずがない。

○…それでは本当の自治とはどういうものだろうか。まずだれでも自分の生活をより良く、より楽しくしようと思っていに違いない。そして、そうするために、自分の生活をどのように改善したらよいかをよく考え、それを自分の手で実行していくというのが本当の自治の姿であろう。その上で、一人だけではなく、実行不可能な問題や多勢で実行した方が効果のある問題がでてきた場合に、とりまとめの役として熟行部が活動するのである。自分が何もしないで、他人に「やれ」と命令するのは虫がよすぎるという感じがする。

○…とはいえ、熟行部が自発的に何もしなくていい、というのではない。まず熟行部としては生徒との間のミゾをうめることに力をつくすべきである。ミゾがある以上、思う存分動けないのは当然である。ミゾがあるという例をとってみると、ささいな事ではあるが、最近の機関紙に不必要に使われている「一般生徒」という言葉がある。これなどは、何か熟行部員ら、熟行部以外の者を差別しているような気がしてならない。そのほかにも熟行部の諸君の態度にどこか無意識のうちに生徒を蔑視しているような感じをもたせている所はないだろうか。これらは放っておくとミゾの幅を広げ、ますます自治活動を麻痺させる事になろう。

○…生徒・委員会・熟行部が〝三位一体〟となった時、初めて自治の女神は土佐校にほほえむのである。

（K・F）

音楽部に〝ギター課〟できる

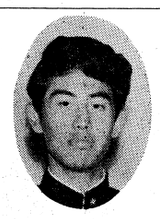
この九月に、音楽部にギター課が設けられた。指導には井上聖香先生があたっており、ギターとマンドリンを扱っている。

井上先生のお話では「生徒からギターのクラブを作ってほしいと前々から要望があったので、都築先生にもお願いし、音学部のギター課として発足させてもらった」とのこと。

先生は大学時代マンドリンクラブに入っておられた関係で、なかなかの腕前。練習は毎日放課後、二Aの教室で行なわれており、今のところ、メンバーは十三名（中三が一名、あとは中二）。メンバーの諸君は「腕のほうはまだだけど、だいぶんうまくなったつもり…」と練習に励んでいるが、井上先生は「そのうちバンドを結成できるところまでゆけば、すばらしいだろうねェ」と夢を語っている。

弁論大会に堂々この成績！

加賀野井君 全国大会で八位に


加賀野井君

全国高等学校生徒弁論大会が十一月十六日、東京港区の発明会館で行なわれ、本校の加賀野井秀一君（三K）が高知県代表として出場した。この大会は、法務省と国際連合などの主催によっておこなわれたもので、地区大会を一位で勝ち抜いてきた代表三十五人が、弁論を競った。

加賀野井君の演題は『平和は地球大で』。民族意識などにとらわれないで、インターナショナリズム、つまり世界的視野に立って平和を築きあげてゆかなければならないという内容のもの。

入賞該当は七位まで。加賀野井君は惜しくも八位であった。

加賀野井君談

自分でも県大会よりできは悪かったと思うが、審査員の感じがすごく違っていたように思われた。

英語弁論大会

では上位独占 鈴木君が優勝

一方、十一月二十三日には、県一回高知県中・高校英語弁論大教育研究会などの主催の『第二十一会』が、県社会福祉会館で催され、本校の鈴木直仁君（一K）ら県下の中、高校生五十五人が参加、熱弁を振るった。

コンテストは、中学生が教材の文章、高校生は自由演題で、それぞれ三分、五分間の持ち時間をいかし、表現力の優劣を競った。

この大会で、高校の部では本校の鈴木直仁君が"I want to be a scientist"という演題で優勝、金子裕子さん（二O）が"We are high school students"という演題で二位になり、上位を独占。また中学の部でも竹内道子さん（二E）、岩貞圭子さん（三C）がそれぞれ二位、三位になった。

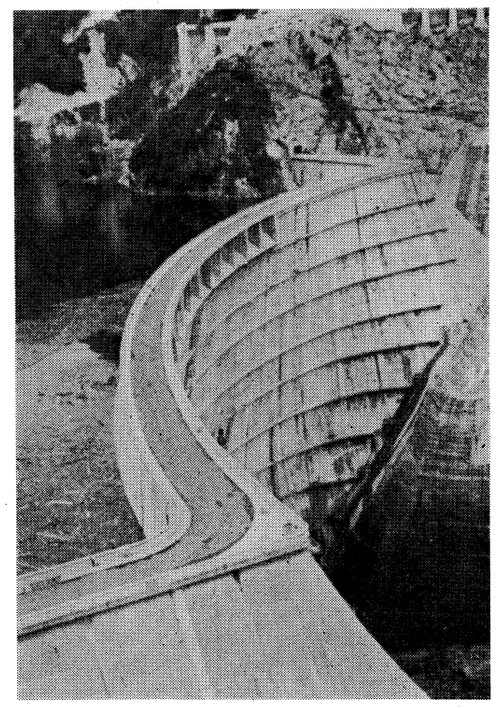
☆☆☆

ヒッチ冒険記

石本浩市

夏休みに黒部から高知までヒッチハイク旅行をしたゴウケツがいる。本校二年Ｋホームの石本浩市君と同じく溝渕健一郎君の二人である。彼らはひとまず黒部まで、「1,100円値切ったテントをかたいで」やって来た。その帰りを、ヒッチの冒険を試みたわけである。

ここに、石本君にヒッチの旅の冒険記を書いてもらった。



苦闘につぐ苦闘

何かの形で自分のために……

すばらしいエネルギー　〝秘境　黒部〟

北アルプス針の木岳を掘り抜いた関電トンネルをぬけるとそこが黒四ダムである。三千メートル級の北アの山々が山頂からいきなり落ち込む。その底を黒部川が流れる。黒部湖はあたりの山々を写して深緑に沈んでいる。これを幅四百メートル、高さ百九十七メートルの黒四ダムががっしりと受け止める。素晴らしいエネルギーである。ダムが出来るまでは人跡未踏の秘峡であったという。しかし八月ともなると秘峡黒部も大したにぎわいを見せる。関電のトロリーバスは毎日何千人もの観光客をこの谷間に送り込む。けれども我々一般観光客はダムサイドからは一歩も出る事はできない。そこがまだまだ〝秘峡黒部〟なのである。

こんどの一番の目標がこの黒四ダムであった。この重量感は何らかの形で自分達に残るだろう。帰りは金がないからヒッチハイクと決め込んで野宿用に千百円値切ったテントをかついで来た。黒部を出て大町を過ぎ夕長野へ。歩けど歩けどヘッドライトは次から次へと無情に通り過ぎる。ついに道端にすわり込み、やたらと手を上げた。一台の車が通り過ぎてはるか前方で止まった。背負う物も負わず、ひきずりながら車の中に走り込んだ。その近くの人だが小諸まで送ってくれるという。「親戚でもあれば泊めてもらってあげるのに」とまでいってくれた。盆踊りでにぎわう小諸までゆっくりと二時間はかかった。千曲川でキャンプ。小渕沢までの八ケ岳の裾野を走る日本一高い観光道路小海線からの八ケ岳の眺めを楽しみにしていたが、不運にも雨に降られ、霧と厚い雲にとうとう山は姿を見せてくれなかった。それでも小雨にけぶる高原は荒涼として素晴らしい。小海線に沿って流れる千曲川には晴天であれば車窓から岩魚の泳ぐのが眺められるそうである。

黒部ダムにて

左・石本君、右・溝渕君

雨中のヒッチ　大学生に〝拾われる〟

小渕沢からは苦しい雨中のヒッチであった。途中上高地に向かうふたりづれの大学生の車に拾われた。本当に〝拾われた〟という感じだ。彼らは我々を横目に見ながら通り過ぎたが可哀想だという事になって引き返してくれたそうである。その夜は諏訪湖畔で野宿。『日本のスイス』、『高原の美しい湖』も今は大手企業の工場が立ち並び、競って湖に廃液を流し込んでいる。塩尻から名古屋まで約百八十キロを一台の車でぶっ飛ばした。一見やさ風の人が親切であったりする。人は見かけによらない。やさしいはずの女性は遠慮かには目もくれない。名古屋では冷たい印象が残った。夜中になりテントをはるべく学校を捜す。あたり前の話だがどこも門が閉まっている。勇気を出してへいを飛び越えると校庭はコンクリートで固めてあったりする。仕方無しに街中の空地で片隅へ水道管が積みあげてある上にゴロン。ずいぶんいたいが不平を言っても始まらない。初めて露天で眠った。こんな調子だから疲労の蓄積は激しい。いきおい会話もつっけんどんになる。ほんのひと言が頭に来る。しかし、友の侵条であるはっきりした会話でこれから先の旅にも自信がわいてきた。

一気に京都へ　石庭に感心

名古屋から米原、琵琶湖大橋まで快調なヒッチ。湖畔のキャンプ地に一泊。湖を渡る風がテントに吹き込んで快適な別天地の夜であった。翌日は比叡越えで京都に出た。最初に見たのが国際会議場で池と緑の木々に囲まれた合掌造りを用いた三角形のコンクリートの固まりだ。私には少しも美しい建物とは見えなかったが、建築家志望の彼には何か得るところがあっただろう。その日は偶然にも大文字焼きの日であった。我々は鴨川にかかる北大路橋の上で眺めたが驚くべき人出で、大文字山と左大文字山に大の字が、北の山に船型と妙法の文字が浮かび上がる頃になると橋の上はあふれんばかりのひと、ひと、ひと。おまけに観光バスがずらっと連らなる。しょっちゅうお互いを確かめ合わねば一生会えないのではないかと気になる。静かな公園を見つけて休憩所のような所（くずれかかりにつき立ち入り禁止の立て札）にビニールをしいて眠った。騒々しい町ばかり通って来た我々はこの町の静けさに感心した。遅くまで話がはずんだ。翌早朝ひどい雨漏りに到頭起こされてしまった。小雨の中を傘もさずに歩いた。数ある名所旧跡の中で龍安寺がすっかり気に入ってしまった。幅十メートル、長さ二十メートル程の狭い石庭。皆縁側に腰をおろし立てひじで眺める。その目の前を〝ポツン、ポツン〟と雨だれがおちる。そっとなでられた一面の小石は今の世にふたつとない水平面で、心がとけるような安らぎを覚える。囲いの小石の上で雨だれが砕けるのもすばらしい趣がある。

全財産五十円也　運ちゃんに弁当もらう

京都を出たのは夕方であった。大阪はわずらわしいというので神戸に宿を求める。途中、陸送の兄さんに乗せてもらった。学生時代に高知までにヒッチハイクしたのだそうで「高知はいいなあ」という。全く奇遇であった。オールナイトの映画館でしばしの眠りをむさぼり翌朝早々に追いだされた。連日の睡眠不足で目もあかない。森閑とした早朝の神戸の町はやけにむなしかった。やっとの思いで姫路へ。ドライブインでさあ食事だという時、全財産八百円のはずがわずか五十円に化けている。仕方なしに飛び出して水道の水を腹一杯。途中世話になったダンプの運チャンに弁当を食べさせてもらった。ふたり真半分に分けて食べた。岡山の町の交差点で徳島ナンバーをとらえ瀬戸内海を無事渡る。

高知の灯だ！

高松からは人のいいおじいさんに丸亀までといいながら琴平までも乗せてもらい、トラック、乗用車と続く。その夜とうとう高知のネオンを遂くに眺める事ができたが田舎方々の町をまわってきたが田舎高知のネオンの輝きがほんとうになつかしい。ただ乗りの虫のいいヒッチハイクだから楽しい旅であったといえば全くのウソだ。ほんとうに苦しかった。だが、少しでも自分達の為になったと思う。別れ際にふたり「とにかくおめでとう」と握手をした。誰かに誘われたなら、又ふらりと何処かに出掛けてしまいそうであった。

＝おわり＝

先生出番です

得竹耕司先生

山行雑感

いつの頃からか、暇を見つけては山を歩くようになった。ずうっと以前は格別興味を持っていなかったのだが、今考えてみるに、これは友人の影響だと思う。彼は山でマムシをつかまえてカバ焼きにして食べたり、ハイカーの捨てたミカンやバナナの皮で、二、三日は過ごせる豪傑である。その彼から山の話を聞かされている間に行ってみる気になったらしい。

それ以来、気が向けばのんびり山を歩くことにしている。一人の山歩きはのん気でよい。気の向く方に歩き、休みたい時に休める。その反面、低い山でも一人歩きは危険な事がある。

五月のことである。例によって日曜日の昼前に目が覚める。快晴で、下宿の窓から見える南嶺の山が青々として非常に美しい。ムクムクと起き上がり、水だけ持って歩き出した。いつの間にか山道が切れ、迷ってしまった。山で迷った時はあわてずに、現在地の確認が第一である。その通り現在地を確認した。即ち「現在地不明」と確認したのである。初めての場所であったし、身長以上のブッシュで何も見えない。仕方なくブッシュをかき分け頂上に出たものの道がなく、下るに下れなくなってしまった。この時の心理状態がおもしろい。自分があわてていることが、不思議にわかるのだ。同じ所を右に左に行ったり来たりしている。結局まっすぐ下り途中三メートルばかりの崖をふみはずし、ひざを強く打って、少しの間動けなかった。やっとの思いで小径を見つけて、治国谷に出て来た。もう夕暮れで、寒くなっていた。

おおげさな話だが、死線をさまよっている時、右か左かを決定する場合の人間の心理状態がわかるような気がする。

山に慣れてくると、低い山にはあきたらず、より高くより厳しい山に行きたくなるものだ。

所用あって、今年一月北アルプスの三、〇〇〇メートル級の四名は、後立山連峰五龍岳に入山した。ここへのコースは三ルートあるが、その中で現在ほとんど利用されない遠見尾根からのルートの事である。夏山とはいえ、天候により上下二十度近くの温度変化がある。急激な気温変化に体が順応せず、四人共にバテ気味である。一人でもバテるとペースが落ち、非常に楽になる。私はそのうちに誰かバテることを内心期待して歩いていたが、とうとう四人共にバテてしまった。その時聞いてみると、他の三人も同じ様な事を考えながら歩いていたという事だ。苦しい時は誰でも同じであるらしい。

登山に対する色々の議論があるが、私は難しい事は言わず、ただ額に汗して登り、美しい景色に出あうとそこで心ゆくまで楽しみ、また黙々と歩くだけである。十一月の連休を石鎚山で過ごしたが、スカイラインと称するものができつつあった。その自然破壊の張本人が営林局とは、寂しい限りである。

それにしても、瓶ケ森から見た、新雪に映える石鎚山は美しかった。

厳冬期の山をヘリコプターで一時間ばかり稜線近くを飛ぶ機会を得た。

その時、冬山を美しいと思った。私は「何故山に登るのか」は愚問であるが、「そこに山があるからだ」も又愚答であると思う。多くの登山家が危険をおかしてまで厳冬期に入山するのは、太古以来「美」を求めてやまない人間の心のなせる業でないかと思う。勿論これだけが原因でないらしいが。例えば、ある高名な登山家は「ある時は雪崩の危険にさらされ、またある時には猛吹雪に南北さえも失ってしまう。大自然の偉大さの前に、人間はあまりにも未熟なのであろうか。しかし未熟である がゆえに、『困難』という言葉を生み、それを克服しようとするところに大きな意義の存在を私達はいつも発見する」と述べている。

更に「単なる情熱の捨て場とか征服欲だけとかの山行でなく、より巾の広い豊かな感受性と高い理想と優れた闘争心を以ってする山行…」と言っている。このようになってくるとも私にはわからなくなる。この域に達するには、もっともっと山に行き、経験を積まねばならないらしい。

しかし難しい事を言っている登山家も、私と同じ様な事を考えるらしい。今年の七月から八月にかけての、二十日間の事である。ベテラン登山家三名と私の五人は、テントの結果によって「日のあたる場所」の座席へ、あるいは「日影の暗い席」にふるい分けられてしまうからである。だから「よく勉強しないと、一流会社、一流大学に入れないぞ」などと言う。それゆえ、生徒は学問の内に関心と課題を見い出し勉強するのではなく、ふるい落されぬため、他人より良い席を確保するために勉強をせざるをえなくなるのである。学習に対する生徒個々の価値観（なぜ勉強するかを決定する根拠）を支配するのは、テストに役立つかどうか、ということだけである。……。誰がどこを、どのように出き、どのように出きなかった、それはどのような原因によるものか、教師の教え方はどこがまずかったか、など点数の場合、いっさい抜き去られる。その上、その抽象的とも言うべき数字（各教科の得点）を今度はさらに、他のすべての教科の得点と足し合わせる。数学五十点、社会四十点、国語六十点、……が合計される。しかし、よく考えると、この五十、四十、六十……、という数字は加算ができるものなのだろうか。りんご五個、馬十頭、人間六人を足し合わせることができるのだろうか……。りんごと馬と人間を足し合わせることができないように、数学と社会と国語の点数を単純に足し合わせることはできないのである。だから、総合得点なるものは各教科の得点よりさらに内容のない、ぬけがらのような数値でしかない。それはただ、選び分け、切り捨てることの目安でしかない。この総合得点の無意味さ、空虚さは順位（席次）に換算されることによって、その極に達する。まさに順位という数値は最も抽象的な数そのものである。……」《鞍川了諦『正常の中の異常』・三省堂》

◇　◇

――試験を、〝心の薬〟と考えられないだろうか。なぜなら、試験は結果によっては、沈んだ心を浮き浮きさせたり、又、楽しい気分を一度に絶望のどん底につき落としてしまうから。

今や、この心の薬は我々学生にとって必要不可欠といわれている。この薬なしには、今の我々は学問をする気にはならないし、又、あるからこそいや応なしに学問をやっている。それがこの薬の最大の目的であり、かつ、効果である、と考えられているのが当世である。

ところで、この薬を我々に与えてくれる先生方は、これをどういう目的で使用しているのだろうか。この薬の〝副作用〟をどう考えているのだろうか。我々には解らない。が、確かに言えることは、現在先生方はその〝副作用〟も治せない〝やぶ医者〟だということだ。

考査で、実テで、と常にこれを飲まされている我々には、この〝副作用〟の例は、次々と脳裏に浮んでくるだろう。その中でも、著しいものは、薬の量の増加に伴った無思考化である。今や、我々の一番の幸せは心の薬を飲む時間も忘れて〝ぼんやり〟とすることである。

全く恐しいことではないか。しかるに、現在我々にできることは、試験が良い意味での心の薬、副作用のない薬と化する時期を、ただ待つということであろうか。

（Ｔ・Ｍ）

外野席

副作用なくせ！

ポットニュース

小島先生近くご結婚

同職が縁して意気投合

大いにテレル小島先生

本校国語科の小島哲雄先生は、松葉川山小学校にお勤めの西村和代さん（二十四才）と結婚される挙式は来たる二十六日、農協会館において行なわれる。おふたりは須崎高校時代の同級生だそうだが当時はめったにことばを交わされたこともなかったとのこと。

今年初め久しぶりで会ったおふたりは共に教職にあるということから意気投合し、その後のおつきあいでついにこのたびめでたく結ばれることとなった。「彼女のごく平凡なところに魅せられてねえ」とおっしゃる哲雄先生。どのような新家庭を？とお聞きすると「フツフッフッ」といわれたきりだった。

高新スポーツ賞受賞

一木君（中学陸上部）

本校中学陸上部、一木譲君（三B）は去る十四日、昭和四十三年度高新スポーツ賞を受賞した。一木君は八月の四国中学総合体育大会陸上四百メートルに優勝、二百メートルに23秒5の本年度全国中学ランク三位に相当する記録を樹立するなどめざましい活躍をしている。感想を聞くと、ニッコリ「うれしいです」とだけ。高校進学後のことはまだ考えていないそうだが今後も大いに活躍してほしいものだ。

一木　譲君

〝彼ら〟に語りかけたい

〝ことえ〟

最近、中高校生に世間で非難される行ないをする者がずいぶん多くなった。我土佐校も例外ではない。相次ぐ不詳事件。それに対する学校側の処分。僕は最初彼らを非難し、彼らが注意され処分されるのをひそかに喜び、学校側の態度を歓迎した。彼らと口をきくの同じクラス、いや、同じ学校にいるのさえいやだった。さらには、それらの事に慣れっこになり、非難する事さえ忘れ、無視して来た一種の〝あきらめ〟のようだったところが、つい先日起きたオートバイ事故の事を聞き、その事情を知るに致り、僕の考え方は全く変わってしまった。『彼らをただ非難できるだろうか。僕自身、もし彼らの立場だったら同じ事をしていたかもしれない』と。そこで彼らが道を間違う原因を考えてみた。戦後の地に足のつかない自由放任主義教育の産物〝利己主義的人間〟―これは僕達自身同じだと思う。複雑な家庭の事情。余りにも多い悪への誘惑。高校、大学、会社への入試等、数枚の紙切れに支配される人間味のない社会。そして苦しみ悩む時、誰が、（先生でも）親身に、せめて話だけでも聞いてやったろう。彼らが「おもしろくない」というのがなんとなくわかるような気がする。

では、僕達が彼らにどうすればいいのだろうか。今、僕にはひとつの大きなモットーがある。それは、『人と語り合わずして人を語らず』ということである。僕は先輩の存在は実に有難かった。常に輪軌逸脱も何度かあった。その過程を克服した現在、僕達は常に希望と目標を持った、まさに生き生きとした学生生活を送っている。ある程度理解していただけたと思うが、もし、事実彼等が僕達と同じような道を歩んでいるものなら、彼らがひと度僕達のように〝燃えた〟時には、広い視野と経験を持った、これからの世界を支える人々となり得ると信じてやまない。今の社会では一度失敗すると仲々立ち直り難い。だから、一足先に経験をした者達が彼らと友達として、時には先輩として語り合い、互いに導き合っていこう。そしてこれを〝土佐校の伝統〟としよう。ただ〝非行〟を防ぐだけでなく、僕達を〝成長〟させるこの輪を、大きく、大きく、社会全体にひろげよう。

（高二Ｙ・Ｏ）

この写真、去る十月の高二修学旅行での一コマ。御前での藤田慈愛に満ちたえて、〝天下泰平〟。

すなっぷ

＜鎌倉の大仏の前で＞

大仏さんの先生と某君笑みをたたえて、〝天下泰平〟。

カメラ・引伸機・8ミリ・映写機
及写真用品・其他写真材料全般
モノクロ・カラーフイルム現像プリント
株式会社　くすやカメラ本店
高知市帯屋町７５
ＴＥＬ　㉒1403　㉒1459
くすやカメラ愛宕店　ＴＥＬ㉒2413
くすやカメラ（和泉町）現像所　ＴＥＬ㉒6324

中華料理
龍園
高知市梅ノ辻57番地
電話㊸５２７１番

よく揃っている
トクヒロ・レコード店
高知・新京橋・大丸北口西
ＴＥＬ　㉓２０５０

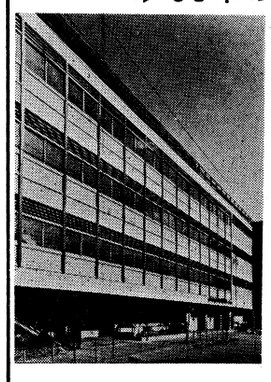
街をゆく　幸せを
ふくすけや

高知一の定評　うまい寿しは
菊寿し　チエーン
本店　大丸西口　10エンひょっとこすし
西店　中央公園西口　追手筋廿代角
はりまや店　中央公園北口
名産センター二階　大丸東口

＊お歳暮はあなたのデパート
土電会館――
〈年内無休〉
夜間営業８時まで
土電
高知・南はりまや町ＴＥＬ㉒0111

古本買入
井上書店
高知市帯屋町72
ＴＥＬ㉒3921
定休日毎週月曜日

駿台高等予備校
▶50年の伝統と成果に輝く大学進学指導◀



昭和43年度
主要大学合格状況
東京大学　1,212名
京都大学　107名
東京工業大学　244名
一橋大学　190名
早稲田大学　2,500名
慶応大学　1,400名
この外一流大学多数合格
駿台出身合格者名簿送呈
学生寮
530名入寮可　入案参照
入学案内請求〒35円要
設置科
◆午前部系（理・文・綜合・特文・特理）
◆午後部（理・文・綜合）
◆夜間部（綜合・学科）
◆高３クラス・高２クラス
入学
▶午前部系は入学選抜試験を施行
○試験日＝３月中旬～４月初旬
○科　目＝英語・数学・国語
▶午後・夜間・高３・高２は無試験
○申込受付＝３月中旬より申込順入学許可　詳細は入学案内を参照下さい
◎補欠入学期７月・12月
詳細は補欠要項を参照のこと
駿河台校　東京都千代田区神田駿河台２―12　ＴＥＬ（292）0311・（293）1571　交通（国電・地下鉄ともお茶の水駅下車）　〒No.101
四谷校　東京都新宿区四谷１―16　ＴＥＬ（359）9777（代表）　交通（国電・地下鉄とも四谷駅下車）　〒No.160
公開行事
夏期講習会　（案内６月初旬発行）
冬期講習会　（案内11月初旬発行）
公開模擬試験　（5・6・8・10・11・1各月）
電子計算機使用による進学判定指導